



# 観光まちづくりレポート

## 温泉と世界遺産で自主・自立の村づくり

～奈良県十津川村～

紀伊山地の真ん中に位置する奈良県十津川村は、神話の時代からたびたび歴史に登場し、明治維新では新しい日本を作る原動力の一翼を担った歴史・文化と自然に恵まれた村である。また、奈良県内随一の泉質・湧出量を誇る温泉郷と世界遺産を擁している。

しかし一方で、多くの山間地と同様に、主要産業の林業の低迷、過疎化・高齢化の波にさらされている。その中、市町村合併を目指さず「自主・自立」を掲げる同村では、行政、村内事業者、村民が連携し、独自の戦略・企画を展開する。

### 「日本一広い村」十津川

紀伊半島の険しい山々に守られるように、奈良県最南端の山間に位置する十津川村は、古くは神武天皇の東征神話の時代から明治維新の時代まで、たびたびその名は歴史上に現れる。

壬申の乱にも出兵したといわれるほど、昔から御所を守護する兵力として朝廷の信任が厚く、そのためその戦功により明治維新时期まで長らく税の免除を受け、半ば独立国的な立場と、旺盛な自立精神から、作家司馬遼太郎は「十津川共和国」とも呼んだ。

その精神は今も引き継がれ、市町村統合が進んだ先頃の平成の大合併の折には、当初から非合併の独立路線を貫き、財政については実質公債比率が奈良県下でも低い市町村で健全財政である。

太平洋にそそぐ熊野川水系の源流に当たる十津川と、そこに流れ込む大小の谷筋に沿って小集落が散在し、昭和20年代に電源開発や灌漑、山林開発を盛り込んだ「吉野熊野総合開発」により国道が整備されるまでは、山間の秘境といった存在で、今も、日本の原風景的な景色を随所に残している。

奈良県の面積の約5分の1を占める広大な村域は、村としては日本一であることから「日本一広い村」をアピールポイントの一つに掲げ、また、その大部分が山林であることから、豊富な自然にも恵まれており、グリーンツーリズムやスローライフを求める都市部からの観光客に根強い人気がある。

### 奈良県随一の温泉を観光の柱に

十津川村内には、湯泉地温泉、十津川温泉、上湯温泉と、共に古い歴史を持ち泉質が異なる温泉が3カ所あり、それらを合わせて「十津川温泉郷」

十津川温泉



湯泉地温泉



村内の温泉宿泊施設には「かけ流しの宿」の提灯が  
(写真提供：十津川村村づくり推進課)

として名高い。

源泉の温度は、それぞれ 60 度、70 度、85 度と高温泉で湧出量も多く、これだけまとまった高温泉は奈良県では十津川温泉郷だけである。そのため、奈良県では唯一、効能や景観が優れている温泉として環境省の国民保養温泉地の指定にもなっている。

そして、豊富な湯量を背景に、平成 16 年 6 月、全国初となる「源泉かけ流し宣言」を行い、山間の温泉郷が一躍その名を全国に広めることとなった。

また、これは、温泉で村づくりを行う、観光産業を村の基盤に据えるという、村を挙げての決意の表明でもあった。

### 「源泉かけ流し宣言」…村の常識が宝物に

山に囲まれる十津川村の主要産業は林業であるが、林業の衰退や過疎化により存続の危機に立たされているといえる。

そのなか、温泉で村づくりを行おうと、村と村内の観光事業者らが集まり勉強を行う一環で、温泉学教授として話題の札幌国際大学観光学部の松田忠徳教授（温泉文化論、観光文化論）を招き講演会を催すこととなった。

来村した教授は、十津川温泉郷の効能と、なによりその豊富な湧出量に着目し、常に新鮮な湯を満喫できる「源泉かけ流し」を全村挙げて宣言することを提案した。

湯量が少なかったり、泉温が低いことにより、効率化のため湯を循環させていることが多い他の温泉地ではまねのできないことで、十津川温泉郷のアピールには最適であった。

しかし、元々、十津川では、温泉に恵まれていることから「かけ流し」が一般的で、温泉も毎日抜いて清掃し、常に新しいものに入れ替えていた。むしろ、温泉を循環させて効率化を図ることの方が先進的であるとさえ考えられていたという。

かけ流しを行う温泉地は十津川だけではないが、教授の話から、常識であった「かけ流し」が実は村の大きな宝物であるということに気づいた十津川温泉郷では、「かけ流し」をあえてアピールするため、全国で初となる源泉かけ流しの「宣言」に至ったのである。

この「源泉かけ流し宣言」を機に、村内の旅館、ホテル、民宿では、統一した提灯を掲げてアピールし、その結果、宿泊者数は、一気に対前年同期比約 40%の増加をみたという。

しかし、間もなく一つの悲劇が訪れることとなる。村の大動脈とも言える国道 168 号線で地滑りによる崩落が発生し、約 3 年にわたり、奈良方面からの交通が迂回を余儀なくされ、観光客数はまた元に戻ってしまった。

重要なタイミングを逸しはしたが、現在では国道も復旧し、渓谷美豊かな自然と温泉で心も身体も癒やされる保養地として、十津川温泉郷を目指す観光客は増えつつある。

### 「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録

「源泉かけ流し宣言」に続き、平成 16 年 7 月、「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録され、十津川村は、高野山から熊野本宮に至る「熊野参詣道小辺路」、吉野山から村内の玉置神社を経て熊野本宮に至る「大峯奥駈道」の 2 つの世界遺産を擁することとなった。

「紀伊山地の霊場と参詣道」には、紀伊半島の「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」の三つの霊場と、これらを結び、奈良県、和歌山県、三重県





高野山と熊野本宮を結ぶ小辺路（十津川村<sup>はてなし</sup>果無）  
（写真提供：十津川村村づくり推進課）

を巡る<sup>おおみねおくがけみち</sup>大峯奥駈道や、熊野参詣道である<sup>こへち</sup>小辺路、<sup>おおへち</sup>大辺路、伊勢路、高野山町石道といった「道」が含まれる。

これらの霊場と参詣道は、1000mを超える山々が古くから神々が宿る所として崇拝され、仏教の影響のもと山岳修行の場となったもので、日本の精神的な原点という目に見えないものをその本質とする極めて重要な地域である。

そこで、村民を中心とした24名からなる有償ボランティアの団体「語り部 十津川鼓動の会」は、世界遺産である熊野古道の案内を通じて、地域に古くから伝わる文化・歴史・精神風土等を守り伝えることを主な活動目的に、将来的には産業化を視野に入れ活動している。

「語り部 十津川鼓動の会」は、世界遺産登録に先駆けて、平成13年10月、村の呼びかけで語り部がスタートし、14年から本格的にガイドを行っているものである。

来訪者への語り部活動として「<sup>はてなし</sup>果無（小辺路）ウォーク」「玉置山（大峯奥駈）ウォーク」を定期的実施しており、近年のウォーキング、トレッキングブームもあって人気が高まりつつあるが、十津川村そして紀伊山地の持つ、奥の深い精神的

な部分に触れてもらうことを第一義としている。

そして、平成19年10月、来村者との交流活性化とホスピタリティに対する活動が認められ、過疎地域の自立活性化につながる事例として、総務大臣より「過疎地域自立活性化優良事例表彰」を受けた。

## 心身再生の郷づくり

市町村合併を目指さず、独立独歩の道を歩もうとする十津川村にとって、厳しい財政の中で事業を行っていくためには、しっかりと将来を見据えた独自の戦略と企画力が不可欠となる。

そこで、十津川村、十津川温泉郷を軸に、村内のNPOやボランティア団体、事業者等が結集し「心身再生の郷づくり実行委員会」を組織し、

- ・官民協働で「心身再生の郷・十津川」が感じられるツアー等の企画運営
- ・「心身再生の郷・十津川」のPRの実施
- ・訪れる人に癒しと活力を与えることのできる人材の育成

などを柱に据え、世界遺産と十津川温泉郷の自然を満喫でき、心も身体も癒やされる保養地として、「心身再生の郷づくり」に官民協働で取り組むこととなり、交流人口を平成17年度の80万人から平成23年度には100万人に増やす目標を掲げた。

そして、この活動は、地方独自のプログラムを自ら考え前向きに取り組む地方公共団体に、国が地方交付税等の支援措置を講じる、総務省「頑張る地方応援プログラム」に選定された。

## 「コミュニティビジネス」で地産地消

十津川村では高齢化が進み、そして村の主な産業、林業も低迷気味である。そこで、地域の高齢者が主体となり、十津川村の隠れた特産品や有機栽培の野菜をつくり販売することにより観光客の減少を食い止め、また高齢者達に働く意欲、楽しさを再認識してもらうことで村全体を活性化させるため、「ほんまもんグループ」が立ち上がった。

当初は5人でスタートした活動も、平成16年からは、村内の旅館やホテルへの村内産食材の販売、また、「道の駅 十津川郷」での地域農産物の定例朝市が始まり、「地産地消」の活動が活発

化した。

そして、若い仲間も増え、平成 21 年度には、「道の駅」のレストラン、喫茶、物販店の指定管理者となるなど、徐々に本格的なコミュニティービジネスに発展している。

かんのがわ

### 神納川農山村交流体験協議会

世界遺産「小辺路ルート」のふもとに位置し、日本の原風景が残る十津川村神納川地区では、都市部の小学生に本物の農山村の暮らしを宿泊体験してもらう「子ども農山漁村交流プロジェクト」を実施している。

これは、農林水産省、総務省、文部科学省の連携施策として立ち上げられた「子ども農山漁村交流プロジェクト」に、奈良県や十津川村役場の呼びかけの元に同地区が名乗りを上げたものである。



(写真提供：神納川農山村交流体験協議会)

「神納川農山村交流体験協議会」の元に参加する民宿・民泊施設に 3 泊 4 日で県内都市部の小学校の生徒を受け入れ、農山村の暮らしを体験してもらうもので、夏休みには小学校の児童が訪れ地区の人々と交流しており、リピートも好調である。

また、この事業には、十津川村と連携関係を築いている奈良県立大学や日本大学も参画しており、両大学の学生等も活動に加わっている。

同地区では、事業を継続的なものにするべく、広く夫婦連れや家族連れなどにも対象を広げ通年の宿泊客の獲得を目指し、旅行雑誌とのタイアップに力を入れており、モニターツアーも積極的に受け入れ、本格的な通年稼働に向けた取り組みが進んでいる。

その中、奈良県による「宿泊観光を促す地域の魅力づくり」事業にも選定され、「ファミトリップ神納川」として、「都会人の心身再生の旅」の受け入れにも乗り出すこととなった。

近年、グリーン・ツーリズム、スロー・ライフがキーワードとして注目され、多くの地域で都市と山村を結ぶ様々なプロジェクトが進められているが、単なるノスタルジーなどではなく、忙しい生活を離れて改めて「ライフスタイル」を問い直す機会としても意義深い。

### おわりに…地方の自主自立

十津川村は、全国の農山村と同様、主要産業である林業の低迷化や過疎化、交付金減額など、存続の危機に立たされているともいえる。

更谷慈禧村長は、この状況をなんとかしようとして立ち上がり、国頼りでは村の将来は無いと「自主自立」を掲げて新たな産業の育成で村おこしを図ることを決意し、観光産業を立ち上げようと動き始める。

しかも、「ハコもの」に頼らない観光産業を実現しようという計画で、特に、熊野古道の参詣道が使えると確証を持ち、官民を挙げて世界遺産を基とした観光開発に取り組んでいるが、この経緯は、テレビのドキュメンタリー番組にも取り上げられた。

元々「十津川共和国」と呼ばれるほど「自主自立」の意識が強い十津川であるが、村行政、村内事業者、そして村民の堅い連携の元で、独自の戦略と企画力により、国や県の数々の支援事業を勝ち取っていく姿は、農山村、さらには地方というものの特徴を示しているともいえる。

(山城 満、井阪英夫)